

『続の原』輪講 発句

二〇一五年(平成二七) 六月二〇日の例会にて発表

担当 青山学院大学大学院・寺尾麻里

○春41番の発句

裸身に花の散来る音羽かな 二園

〈作者について〉

作者三園は、未詳。「いざ子ども」歌仙(元禄二年十一月一日)、「木のもとに」歌仙(元禄三年三月二日)に名が見える。『続の原』では、当該句のほか、「やさしさは焼野に開くつゝし哉」(春五十七番)、「とこなつを見れば羽織の暑さ哉」(夏三十五番)。『続虚栗』に五句入集。

〈語注〉

・「花」によって、春。
・裸身 裸のからだ。裸体。
・音羽 ここでは、「音羽の滝」。現在の京都市山科区音羽に所在するものと、京都市東山区の清水寺奥の院の崖から流れ落ちる水をいうものがあるが、ここでは後者か。「裸」と「滝」を結んだ句例に、「裸になつて養老が滝」(『天満千句』第三百韻・二九〇・西鬼)がある。また、「花」と「音羽」の取り合わせについては、「山風の吹きぬるからに音羽川堰き入れぬ花も滝の白波」(『新続古今集』・春歌下・一六三・雅経)等、歌例は多い。清水寺の「音羽の滝」について「花」を詠んだ歌例は、詞書「清水寺に参りけるに、滝の下の花の盛りなるを見て」として、「嵐吹く音羽の山の花盛り散らぬをなかつ滝の白浪」(『衆妙集』・二三五)等がある。

〈句解〉

「裸になつて滝へ入つたこの身に、滝の白浪とも知れぬ花が散つて来る音羽であることよ。」単に滝に散り来る花を詠むのではなく、「裸身に」として滝へ入っている人物を描写し、その裸体へ花が散りかかつてくるさまを描出している点が面白い。

○春42番の発句

物皆自得

花にあそぶ虻なくらひそ友雀 芭蕉

〈作者について〉

芭蕉……俳諧師。正保元年(一六四四)～元禄七年(一六九四)・一〇・一一、五十一歳(『芭蕉翁行状記』)。季吟門。伊賀国阿拝郡小田郷上野赤坂(三重県上野市赤坂町。当時、農人の町)の郷土松尾与左衛門(明暦二年没)の次男に生まれる。生家は伊賀平氏の末流で、中世南伊賀に有力集団を結党した在地土豪の後裔として藩政期に無足人(無給の準士分)に編入された松尾氏の支族と推定される。『俳文学大辞典』普及版)

〈語注〉

- ・「花」によって、春。
- ・物皆自得 生き物は皆それぞれに天から与えられた性に従って楽しんで生きている、の意。万物は人知をはるかに越えた宇宙意志（道の本体）の具現したもので、従って万物は一如、その間に価値の差別はないとする庄子哲学から出た自然観。漢詩にも「自得ノ楽シミ」など頻出するが、ここは程明道「秋日偶成」詩の「万物静観スベ物皆自得」による。貞享四年作「蓑虫説跋」にも「静かにみれば物皆自得す、といへり」とあり、当時の芭蕉にはこの観点が強い。（『芭蕉句集』新潮日本古典集成）
- ・花にあそぶ 『笈日記』では上五「花を吸ふ」の形で載せる。「花に遊ぶ」ものは、古典的発想においては「蝶」である。ここから、更に「胡蝶の夢」を想起させる可能性がある。そのような例として、「春の夜は胡蝶と我や成りつらん花に遊ぶと見ぬ夢もなし」（逍遊集・二五三）が挙げられる。
- ・虻 ここでは花虻を指す。
- ・友雀 友であるはずめ。はずめを親しみをもって呼ぶことば。（『日本国語大辞典』）

〈句解〉

「蝶のごとく花に舞い遊んでいる虻を食べたりするな、雀どもよ。おまえたちが食らわんとする虻も、その性にしたがって楽しんで生きているのだ。」
「花に遊ぶ」から想起されるのは、古典文学の発想としては「蝶」であるが、それを「虻」としたところに俳諧味がある。

○春43番の発句

月移花影上欄干

月影のひた植うゑかゆる桜かな 不卜

〈作者について〉

作者の不卜は既出。春14番参照のこと。

〈語注〉

- ・「桜」によって、春。
- ・月移花影上欄干 「月は花影を移して欄干に上らしむ」。王安石「夜直」（「春夜」）による。「金爐香燼漏聲殘 剪剪輕風陣陣寒 春色惱人眠不得 月移花影上欄干」（『千家詩』）『詩人玉屑』など。この詩句の表現は、「夜深不語中庭立 月照藤花影上階」（『新撰朗詠集』・春・一三〇・白居易）（和歌文学大系47『和漢朗詠集・新撰朗詠集』）にも通じ、趣向としては、夜が更けていくその時間の経過を、影が伸びることによって表しているところに眼目があるといえる。
- ・ひた 名詞、またはこれに準ずる語、まれに動詞の上に付いて、それに徹したさまを表わす。（『日本国語大辞典』）

・植かゆる 植え替える。ここでは、他所に移すことではなく、植木の生長の度合いに応じて鉢を一回り大きいものにする、つまり、生長のために手をかけるような意味合いか。

〈句解〉

「夜が更けるにしたがって、月が空の高いところから西へ沈んでいくそのあいだ、一心に植え替えたようだ、こんなにも背の高くなつた桜の木の影であることよ。」

その影の動くことを漢詩句を踏まえて取り上げ、それを更に、月が「植かゆる」とした点が趣深い。

○春44番の発句

朝なあさくあさな鏡におこれ花ざくら 文鱗

〈作者について〉

作者の文鱗は、生没年未詳。鳥居氏。境の人。江戸住。別号、虚無斎。『丙寅初懐紙』『続虚栗』『花摘』等に入集。『続の原』では、句合わせの部に、秋九番左句に「菊の花気にある草のそだち哉」、冬三番右に「いづれ狸得失覚て犬もなし」を収める。

〈語注〉

- ・「花ざくら」によって、春。
- ・朝な朝な 朝ごとに。毎朝。『日本国語大辞典』
- ・鏡 花を映す水面の隠喩。連歌においては、「池の水は花の顔見る鏡かな」『菟玖波集』
- ・発句・二〇四三、「花の鏡や水匂ふらん」『新撰菟玖波集』・羈旅上・二四八四)等のように詠まれる。
- ・おこれ 奢れ。

〈句解〉

「毎朝、鏡のような水面に映つたおれの姿を誇らしく思いなさい、花桜よ。」
毎朝鏡に向かつて身支度をする女のような風情を、水面に映つた花にもたせた点がおもしろい。「花の顔」を経由した発想か。

○春45番の発句

山櫻住メば佛とふたりかな 蚤山

〈作者について〉

作者の蚤山は、未詳。

〈語注〉

- ・「山櫻」によって、春。
- ・ふたり 山櫻は、「ひとり」と結ばれることが多い。そのような歌例に、「誰にかも今日を盛りと告げやらんひとりみまうき山桜かな」『風雅集』・春中・一七八・顕昭)、「は

や句へひとり眺むる山桜咲かずは誰か尋ねてもこむ」(『拾玉集』・一三〇五)等、句例に
「あれよあれよといふものひとり山桜 枳風」(『続虚栗』・一二六)、「なつかしや身ひと
りに降る山桜 琴風」(『其角十七回』・九一〇)等がある。

〈句解〉

「山桜が咲く山居に住み仏道修行に専念している私は、心が澄んでいき、仏と私の二人
きりである。」

通常、「山桜」は「ひとり」で眺めるものであるが、仏道修行する者のそばには常に仏の
存在があり、仏と「ふたり」であるのだ、と転じた点が趣深い。